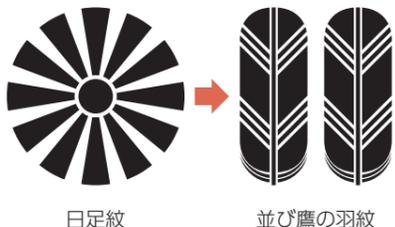




▲蒙古襲来絵詞 文永11年(1274年)と弘安4年(1284年)の2度にわたる元寇に出陣した、肥後国御家人・竹崎季長を中心に展開する絵巻。これは季長が志賀島へ向けて生の松原を出発する場面。中央の騎馬武者が季長で、中央奥の石垣に腰掛け赤い扇子を持っているのが武房



▲菊池家憲「寄合衆内談の事」 動乱の中で一族の団結力を高め、難題に立ち向かうために制定した3か条からなる起請文(誓文)



▲菊池氏の家紋 菊池氏の家紋「並び鷹の羽紋」は6代隆直のころに改められたもので、以前は「日足紋」という紋を使っていた



▲袖ヶ浦の別れ 裏切りに会い敗退を覚悟した武時が、一族の再起を図るために息子の武重と武光に帰郷を命じた場面



▲菊池一族の祖・藤原則隆

風雲 菊池一族

菊池一族は、平安時代の後半から戦国時代のころ

(1070年〜1532年)まで約450年もの間、菊

池地方を中心に栄えた武士の一族です。最盛期には九州

一円に影響力を及ぼすほどの勢力を持っていました。

今回は菊池一族の歴史をたどってみます。

問い合わせ先 生涯学習課文化振興係

☎0968(25)7232

菊池一族のルーツ

近年まで中央の有力貴族である藤原氏にあるとされてきました。第17代武朝が、仕えていた吉野の朝廷に送った手紙(菊池武朝申状)に「大宰府の長官藤原隆家の子孫則隆が、菊池氏の始まりだ」と書いていたからです。しかし、最近の研究では、初代則隆は地方の豪族で、11世紀前半に藤原隆家に仕えた武人であったという説が有力視されています。

則隆赴任。領地拡大へ

初代則隆〜2代経隆(1070年〜) 当時の菊池は大宰府天満宮領赤星荘という大宰府の所有する荘園でした。その荘官(現地の役人)として、藤原則隆が菊池へ赴任し、深川に居を構えます。これは後の十八外城の一つである菊之城に当たりますが、城と言っても赴任当初は争いを想定するものではありません。

3代経頼〜5代経直(12世紀初頭)

3代経頼は肥後の領地を固めつつ、筑豊地方に進出して広大な領地を獲得しました。その領地を鳥羽上皇(白河上皇の孫)に寄進することで、朝廷とのつながりを強めていきます。その影

源平、元寇、不遇の時代

6代隆直〜9代隆泰(12世紀中頃)

菊池氏にとっては不遇の時代です。当時平家の勢いはとどまるところを知らず、九州までも支配下に入れようと勢力を拡大していました。これに対抗するため、6代隆直は近隣の豪族たちと結束し内乱を起こします。

このとき、隆直は周りの豪族から「肥後権守」と呼ばれていました。これは菊池一族が実質的な肥後の国司(トップ)としてその他の勢力からも正式に認められていたことを示しています。しかし、大飢饉の影響もあり平家に降参。以後は平家方として戦うことになりました。平家の没落後は鎌倉幕府に多くの所領を奪われ、冷遇されることになりました。

10代武房(13世紀中頃)

この状況を挽回しようと活躍したのが、10代武房です。元(モンゴル)軍が攻めてきた元寇では、当時を記録した「蒙古襲来絵詞」に2回も登場する

忠節と一族の絆で九州を平定

12代武時〜13代武重(14世紀初頭)

12代武時は、反幕府の立場で鎮西探題(九州の幕府の本拠地)を襲撃しようとしていますが、共謀していた小武氏、大友氏に裏切られ窮地に立たされます。息子たちを菊池へ帰した後(袖ヶ浦の別れ)、探題館で壮絶な戦いを繰り広げますが、寝返った少武・大友軍に背後を突かれて討死しました。倒幕後、この忠節ぶりが高く評価され、子の13代武重は後醍醐天皇から正式に肥後守(肥後のトップ)を任せられます。

武重はその後、菊池家憲と呼ばれる「寄合衆内談の事」を作成しました。天下を左右するような大事以外は、総領の独裁ではなく話し合いで決めるという内容で、日本初の血判文書とされています。この文書は500年後、明治天皇が「五箇条の御誓文」を示す際、参考にされたといわれています。

次ページへ続く



全184ページ。作画は漫画家の森藤よしひろ氏。

市民有志でつくる「菊池祭り復興を考える会」が1995年に企画・編集した漫画です。祖先の偉業を漫画本にして、子どもから大人まで郷土への理解と誇りを持ってもらおうと企画・制作。歴史上の場面を躍動感たっぷりに描写しており、小学生にも分かりやすい内容になっています。市内の図書館(室)で貸し

市民制作の漫画を映像化で再活用

今回、この漫画にせりふ・音楽・効果音を付けてデジタル映像化しました。教育分野での活用のほか、菊池一族の歴史をまちの魅力として全国に発信し、観光振興につなげることも目的としています。

予告編を公開中

市ホームページに特設ページ「菊池一族 夢爛漫」を開設し、映像化第一弾となる予告編を公開しています。きくち秋まつりの前に、もう一度菊池一族の歴史を振り返ってみませんか。「菊池一族 歴史交流シンポジウム」でも上映予定です。詳しくは次ページへ。



こちらから動画が見れます!



QRコードはホームページ上で予告編が視聴できます。AR動画は専用アプリが必要です。視聴方法は36ページをご覧ください。

特設ページ オープン!!

菊池一族 夢爛漫

菊池一族絢爛の歴史を「初めての人にも分かりやすく」をコンセプトに制作しました。ただけでなく切ない物語に思いをはせながら、波乱に満ちた彼らの足跡をたどってみませんか。

▼菊池一族 夢爛漫

<http://www.city.kikuchi.lg.jp/kankou/q/list/184.html>

▼菊池一族 夢爛漫 主なコンテンツ

- 人物伝
- 散策マップ
- まんがムービー
- 十大逸聞 ほか

「菊池一族 夢爛漫」特設ページ



今後もさらに内容を充実させていきます!

まんが 風雲菊池一族

映像でよみがえる!

21年前に発刊された漫画本「まんが 風雲菊池一族」いまよみがえる白龍伝説」をデジタル映像化。第1章から第5章まで制作し、ホームページで順次公開します。

出しています。

今回、この漫画にせりふ・音楽・効果音を付けてデジタル映像化しました。教育分野での活用のほか、菊池一族の歴史をまちの魅力として全国に発信し、観光振興につなげることも目的としています。

予告編を公開中

市ホームページに特設ページ「菊池一族 夢爛漫」を開設し、映像化第一弾となる予告編を公開しています。きくち秋まつりの前に、もう一度菊池一族の歴史を振り返ってみませんか。「菊池一族 歴史交流シンポジウム」でも上映予定です。詳しくは次ページへ。

パンフレットは市役所や物産館、道の駅などに置いてあります。ぜひご利用ください。



▲菊池一族のスヌメ

24代当主の中から5人の物語をピックアップ。忠義を貫き乱世を駆け抜けた一族の生きざまを紹介

▲菊池一族散策マップ

史跡や文化財などを巡る散策ルート(3.5km・10分)を掲載。散歩やウォーキングを楽しみながら一族の歴史に触れることができる



◀菊池万句 (市指定文化財)

「月」をテーマに家臣や僧などの館20カ所の会場で500句ずつを詠んだとされる



▲菊池千本槍 (市指定文化財)

箱根竹ノ下の戦いでしんがりを務めた武重は、竹の先端に小刀を結びつけた即席の槍を作り、足利軍3千人を相手にわずか千人で撃退。これが後に菊池千本槍と呼ばれるようになった



▼將軍木 (熊本県天然記念物)

菊池高正門西側にある棕の木。懐良親王が植えられたと伝えられている。現在は將軍木を親王に見立て、毎年10月13日に能が奉納されている



15代武光 (14世紀中頃)

15代武光は、後醍醐天皇の皇子・懐良親王を征西將軍として九州を平定する大南朝方の中心として九州を平定する大勢力になります。

宿敵の少弐氏を破った筑後川の戦い(大保原の戦い)は「大刀洗川」の語源にもなった有名な戦いです。北朝方6万、南朝方4万と伝わる九州史上最大の合戦で、関ヶ原、川中島と並ぶ大きな戦だったといわれています。

正観寺や菊池五山などの寺院を定めたとされ、現在も市の文化財として大切に守り継がれています。国の重要無形民俗文化財に指定されている「菊池の松籬子」は、この頃に始まったと伝えられています。

16代武政〜17代武朝 (14世紀末〜15世紀初頭)

16代武政の下、一族の本拠地は深川の菊之城から隈府の守山城(現在の菊池神社)へ移ります。17代武朝は、懐良親王の甥である良成親王と共に、九州探題(幕府が九州統治のために置いた役職)の今川了俊を相手に、水島の戦い、詫磨原の戦いと勝利を重ねます。しかし、最終的には本城(守山城)を奪われ、南朝が折れるかたちで南北朝が一つになりました。

刀から筆へ 文教菊池の礎を築く

20代為邦〜21代重朝 (15世紀後半)

南北朝の合一後、菊池一族の勢力は次第に衰えていきますが、文教の分野で中央にも聞こえるほどの発展を見せました。

20代為邦は家臣に対して学問を推奨し、儒学を広め、今の七城地区に碧巖寺を建立。21代重朝は孔子堂を建立したほか、自身や家臣の家で、1日で1万句を読んだ連歌の会「菊池万句」を催すなど多くの功績を残し、現在の文教菊池の礎となっています。

22代能運以降 (16世紀〜)

第22代能運以降、菊池氏は24代(26代の説あり)で幕を下ろしますが、その末裔は全国へ広がり、地域に根付きました。現在もそのつながりは続いており、菊池一族を縁として、宮崎県西米良村と姉妹都市、岩手県遠野市、鹿児島県郷町と友好都市を結び交流を深めています。

市内には、菊池一族を祭った菊池神社、將軍木、菊池五山、十八外城など、史跡や文化財も多く残っています。散策を楽しみながら、一族の歴史に思いをはせてみてはいかがでしょうか。